



主日礼拝説教 — 2018年1月7日

## 良き人には良きコーチが必要

聖書 ヨハネによる福音書 10章1～5節  
エゼキエル書 34章1～11節  
説教 武田 真治

### 1、「わたしは良き羊飼い」

新しい年の最初の主の日（日曜日）に、こうして礼拝に招かれて出席できたことを深く感謝します。今年も礼拝から礼拝へと歩みを進める中で主の御言葉に導かれて行きたいと願っています。

日本的に言えば、今年は戌（いぬ）年なのだそうで、私は年男になるそうですが、聖書にはそれほど犬は登場して来ません。聖書に最もたくさん登場する動物は何と言っても羊でしょう。圧倒的にたくさん出て来ます。このヨハネ福音書10章も全体に亘って羊に関するイエス様の言葉がずっと記録されています。その中でも有名な言葉は「わたしは良い羊飼いである」という言葉でしょう。11節と14節に二度もあります。この章は終始、イエス様が真の羊飼いであることを示してくれています。

### 2、「盗人であり、強盗である」

ただ、この10章のイエス様の言葉が羊や羊飼いの話だから、あのクリスマスの夜のようにイエス様の周りに羊や羊飼いがおだやかに座っているような牧歌的な話になるのかと思って読み始めると、とんでもないことで、いきなり厳しい言葉が始まります。即ち「はっきり言っておく。羊の囲いに入るのに、門を通らないでほかの所を乗り越えて来る者は、盗人であり、強盗である」と。なんと「盗人」や「強盗」の話から始まっているのです。なぜこのような話題から始まっているのでしょうか。

解説者の多くは、いきなりイエス様の言葉でこの章が始まっていることから、これは直前の九章の続きではないかと主張しています。生まれつき目の不自由な方をイエス様が「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである」と言われて癒してあげられた出来事です。その人を当時のユダヤ教を支配していたファリサイ派の人たちが尋問し、イエス様に従わないようにその親をも呼び出して説得したのに、従わないため「彼を外に追い出した（＝破門、村八分にした）」のでした。そのファリサイ派の人たちこそ「ほかの所を乗り越えて」囲いの中に入り、羊を盗もうとする強盗だから警戒しなさいと教えられたのではないかと読めると。そうかもしれません。

ただ、ファリサイ派の人たちに限定しなくても「囲い」の中にある羊（＝私たちイエス様に従う者たち）を盗もうと外から無理やり囲いの中に入ろうとする者たちの存在は現実にくらでもいるのではないのでしょうか？ 無理やり奪い取るだけでなく、甘い言葉ややさしい物腰で近づき、いかにも自分たちに従えばもっと良い目を見ることができると誘惑してくる人達が。





イエス様は言われます、そのような者たちこそ「盗人」であり「強盗である」と、警戒しなさいと。

私が思いますのは、普通、羊や羊飼いが恐れるのはオオカミや野の獣のはずです。それは、旧約聖書でダビデが「僕は、父の羊を飼う者です。獅子や熊が出て来て群れの中から羊を奪い取ることがあります。そのときには、追いかけて打ちかかり、その口から羊を取り返します」と言っているようにです。そのことを良く知っておられたであろうイエス様が、しかしより警戒すべきなのはむしろ「盗人や強盗」であると、それは野の獣やオオカミよりはるかに恐ろしいのは「人間」だと言われているのです。悪意を持って群れに入り込もうとする人間こそ最も怖い存在であり、警戒すべきだと言われているのです。まさにこの世の現実を示しておられるように思えます。

### 3、「門番は羊飼いに門を開き」

ここでイエス様は、羊を守る羊飼いに對して奪い取ろうとする強盗を登場させることで警告を与えようとしておられますが、もう一人、登場人物が居ることに気付かれたでしょうか？それが「門番」です。即ち「門から入る者が羊飼いです。門番は羊飼いに門を開き、羊はその声を聞き分ける」です。この門番とは誰のことを考えて言われているのでしょうか？

この門番については二つの理解があります。一つはその村や地域で共同の「羊の囲い」があり、その門番のことであると。夜になると、ほうぼうで放牧していた羊飼いたちが自分の羊を連れてその囲いにみんな集まって一緒に過ごしたのだと。それであると門番は単なる雇い人ではありません。

それに対して、門番はその大事な「囲い」の鍵を持っている人であるのだから、囲いや家屋や施設全体の責任を持っている人物（＝所有者）とも考えられるのです。わざわざイエス様が門番という人を登場させられ、この門番の赦しがないとすれば囲いの中に入ることが出来ないのであり、その門番のいる「門」を通らないで他の所を乗り越えて来る者が盗人や強盗だと言われておられるのですから、やはりこの門番は特別な存在でしょう。おそらくこの囲いの中にいるすべての羊たちの所有者として考えられているのではないかと。そうであるなら、この門番はまさに天の父なる神様のことを指しているのではないのでしょうか。私たちすべては神様の大事な羊であることをイエス様は前提とされておられるのではないかと思います。そして良き羊飼いは、その門番に信頼されて羊の群れを世話し、育てていくことをすべて任されている存在なのだ。それがまさにイエス様の存在なのだ。そして、逆に神様の羊だからこそ、その羊をこっそり奪い取ろうとする者は「盗人」だと言われているのです。つまり神様の羊を自分の羊にしようとしているからです。

言い換えれば、人々を導こうとしている牧者や指導者について、その人が本物の指導者であるか、それとも偽の指導者であるかを〈見分ける〉方法は、その導こうとしている弟子や信徒たちのことを神様の羊として育み、神様のご用に役立つように成長してくれることを喜びとしているか、それともその羊を「自分の羊」にしてしまおうと考えているかであると。羊が神様に結びつくことを目指さず、自分が結びつくことで羊を繋ぎとめようとする指導者は偽物です。そのような指導者は自分の言うことを聞かなくなった途端にその羊を「外に追い出す」の





です。勝手にオオカミや野の獣に食われてしまえと。これは、この世の指導者と呼ばれる人達、政治家や役人、教師や上司に対しても通用する〈見分ける〉方法ではないかと言い得ます。導こうとする相手を神様に愛されている人と見做しているか、少なくとも一人の人間として正しく接しているか、それとも自分の所有物、自分の言うことを聞かせるだけの従者と考えているか、そこで本物の指導者と偽物の指導者が見分けられると、そして偽の指導者に従って行くと大変な目に会うと。

#### 4、「羊飼いは自分の羊の名を呼んで」

更にイエス様は、本当の羊飼いは朝になるとその「囲い」から「自分の羊の名を呼んで連れだす」と言われています。

ここで読み飛ばしてはいけない点は、良き羊飼いはその羊の名前を〈一匹一匹〉呼んで連れて行くという点です。その一匹一匹にちゃんと名前、呼び名を付けて接しているからこそできることなのです。まさに「自分の羊（これは所有している羊というより、担当している羊の意味でしょう）」と言い得るほどにその羊一匹一匹に精通し、愛しているからできることです。弟子や教えている相手を十把ひとからげに見ないということであり、時にはこの羊は体調がよくなさそうなので今日は連れ出さないということも出来るのです。

そして大事なことは、イエス様がこれらの羊について「羊はその声を聞き分ける」「羊はその声を知っているので、ついて行く」と言われている点です。これは羊（＝弟子や信徒）に対するイエス様の好評価、厚い信頼を表しています。彼らは必ず自ら真の指導者の声を聞き分けて後をついて来ると言い切っておられるのです。

ここにもイエス様が私たち一人一人を何が何でも言う事を聞かせ、首に縄を付けて無理に連れ出そうとはしておられない接し方（＝一人の人間として）がよく表れているように思います。私たち一人一人に対しても「きっと、私の声に答えてくれるはずだ」と信頼して、私たち一人一人の名前を呼んで下さっているのです。応えて行きたいと願います。

最後にイエス様は、良き羊飼いは「自分の羊をすべて連れだすと、先頭に立って行く。」とあります。羊たちを一匹一匹呼び出された後に一つの群れとされ、その「群れ」の「先頭に立って」群れを導いて行かれると。決して、うしろから群れを追い立てたり、勝手に行きたい所へ行けと放任されるのでもありません、自ら先頭に立つと。

それは群れが安全に通れる道を探すためであり、オオカミや野の獣を警戒し、出てきたら自ら戦うためです。その姿こそ、まさにイエス様ご本人のお姿ではないでしょうか。自ら十字架を背負い、私たちに先だって歩み行かれ「あなたがたも自分の十字架を背負い、わたしに従え」と招かれるお方こそ真の「良き羊飼い」その方です。

（説教より抜粋、編集）

